

編集後記

9月を迎えました。暦の上では秋とはいえ、まだ夏の名残を感じる日々が続いています。一方、朝夕には少しずつ涼しさが感じられ、季節の移ろいに気づかされます。季節の変わり目は、私たち自身の体調や食生活を見直す機会でもあります。「食べること」は日々の営みの中であまりに身近ですが、生命を支え、病からの回復を支えるという意味で、栄養は医療の根幹をなすものと改めて感じます。

さて、今回の学会誌 JSPEN Vol. 8 No. 3 には、日々の栄養治療に多くの示唆を与えてくれる論文が掲載されています。私の一押し論文は、吉川千遥先生らによる「敗血症患者に対する栄養ケアプランの記録の質評価と運用実態：NCP-QUEST を用いた単施設後方視的研究」です。本研究では、敗血症患者に対して管理栄養士が作成した栄養ケアプランを、Nutrition Care Process–Quality Evaluation and Standardization Tool (NCP-QUEST) を用いて客観的に評価しています。初回ケアプランは Intensive Care Unit/High Care Unit 入室後中央値 19 時間と早期に作成され、その後も継続的に更新されていました。一方、記録の質には改善の余地があることも示されています。興味深いのは、Sequential Organ Failure Assessment スコアが高い重症例ほど、栄養ケアプランの記録が充実していた可能性が示されたことです。栄養ケアでは、何をどれだけ投与したかだけでなく、患者の問題をどのように捉え、介入し、評価して次のケアにつなげたのか、その思考過程を記録し多職種で共有することも重要です。「記録の質」に光を当て、それを可視化した本研究は、日常診療を見直すうえでも大変意義深い報告だと思います。

また本号には、脊髄損傷急性期における Nutrition Support Team 介入の実態と課題を検討した報告もあり、多職種による栄養管理の重要性を改めて考えさせられます。さらに、ICU 患者の refeeding syndrome に関する報告や、食物アレルギーを背景とした長期間の食事内容の固定化により葉酸・ビタミン B₁₂ 複合欠乏性巨赤芽球性貧血を呈した症例など、「栄養を診る」

ことの奥深さを感じさせる内容がそろっています。

日々の臨床にある疑問を拾い上げ、検証し、その知見を再び臨床へ還元することは、栄養治療の質を高める大切な一歩です。今後も学会誌 JSPEN が、学会員の皆さまとともに栄養治療の課題とその解決策を共有し、明日からの診療につながる場であり続けることを願っています。

2026 年 9 月吉日

e-journal「学会誌 JSPEN」

編集委員会

名古屋市立大学医学部

総合診療医学・総合内科学

講座

中山真美



編集委員会

委員長：石橋生哉

副委員長：千葉正博

編集委員：浅桐公男

小川恵子

川口 巧

立石 渉

谷口英喜

中山真美

宮田 剛

元井冬彦

学会誌 JSPEN Vol. 8 No. 3

令和 8 年 9 月 30 日発行

一般社団法人 日本栄養治療学会

〒103-0022

東京都中央区日本橋室町 4 丁目 4-3

喜助日本橋室町ビル 4 階

MAIL：jimukyoku@jspen.or.jp

ジャーナル制作 中西印刷株式会社

©2026 by Japanese Society for Parenteral and Enteral Nutrition Therapy